ふたりの母

実母と義母の誘い

芳川葵
挿絵／岬ゆきひろ

立ち読み版

KTC
KYU TIME COMMUNICATION

Contents

目次

第一章 【甘美】憧れの義母・懐かしの実母……4
第二章 【体験】義母の肉洞・実母の豊乳……55
第三章 【禁断】函館の一夜　実母と……108
第四章 【誘惑】母の想いが息子を滾らす……155
第五章 【競艶】ふたりの母との新たな関係……216

登場人物 *Characters*

峰村 宗介
(みねむら そうすけ)

高校一年生。思春期で義母の映美里に女として魅力を感じている。再会した実母の小夜子にも心をときめかせる。

峰村 小夜子
(みねむら さよこ)

宗介の実母。茶道家で茶道教室を開いている。着物が似合う凛とした純和風の美熟女。十二年前に宗介の父親と離婚し、宗介と離れて暮らしていた。

峰村 映美里
(みねむら えみり)

宗介の義母。八年前に宗介の父親と結婚。義理ながら息子の宗介に深い愛情を抱いている。優しくしっかり者だが、宗介に対しては甘い部分も。

「お願い？」
「ええ。ねえ、宗ちゃん。今夜は昔みたいに、ママと一緒に寝てくれないかしら？」
「えっ？」
あまりに予想外の言葉に、宗介は驚きに目を見開き、まじまじと小夜子を見つめてしまった。確かに小さかった頃、母の布団で一緒に眠った記憶は朧にある。だがまさか、高校生になった息子に願ってくるとは思ってもみなかったのだ。
「ダメかしら？　ダメよね。宗ちゃんももう高校生ですものね。忘れてちょうだい。ごめんなさいね、お勉強を邪魔しちゃって」
呆然としている宗介に、小夜子は寂しそうに顔を曇らせ、謝罪と撤回を口にしてきた。その母の表情に、胸がグッと締めつけられ、罪悪感すら覚える。
（ママはきっと、離れていた十二年間を少しでも取り戻そうとしてるんだ。だから、突然、こんなことを……。いまここで僕が拒否したら、ママを悲しませちゃう）
「いいよ、ママ。僕、今夜はママの布団で一緒に……」
自分と暮らすことを楽しみにしてくれていたのは、肌で感じて分かるだけに、宗介は小夜子の申し出を受け入れることにした。
「ほんと？　本当に、いいの？」
「うん。もうすぐ今日のノルマは終わるから、そうしたら、ママのお部屋に行くよ」

沈みかけた表情が一転、心からの喜びをあらわすような満面の笑みとなった小夜子に、宗介も自然と笑顔になっていた。

「あぁ、宗ちゃん。ありがとう。じゃあ、ママはお部屋で待っているわね」

そう言うと実母は、宗介の右頬にチュッと軽くキスをし、部屋から出て行った。

「マっ、ママ……」

小夜子のふっくらとした朱唇が触れた右頬に右手をあてがい、ブルッと背筋を震わせながら、その後ろ姿を見送るのであった。

（ママと同じ布団で寝るってことは、ママの身体と触れ合っちゃうってことだよな。だとすると、あの大きなオッパイも……。あぁ、どうしよう。嬉しいけど、いまみたいに硬くするわけにはいかないしな）

右手を頬にあてがったまま、左手を股間におろしていく。刹那、ビクッと腰が跳ねあがった。パジャマの下で、ペニスは完全勃起を維持しつづけていたのだ。豊乳が揺れるさまを見ただけで、こんなにもいきり立ってしまう淫茎。もし少しでも触れることになれば、その瞬間に射精してしまうことだってあり得た。

（今日は昼間、義母さんの生オッパイを見たり、下着をもらったりして、ずっと溜まっている状態なんだよな。こんなことなら、お風呂で抜いておけばよかった。あっ、そうか！　明日からはお風呂に入ったときにオナニーすれば、後始末も楽になるな。

それに、お風呂なら義母さんの下着を使って汚しちゃっても、すぐに濯げるし）

いつしか思考は、日々の欲望発散の方法に向かっていた。

だがすぐに、目前に迫った問題へと戻っていく。

（とにかく今夜は、ママで勃起しちゃわないよう、注意しないと。久しぶりに会った息子が、母親の身体で興奮しているなんて知ったら、ママを悲しませることになっちゃうもんな。よし、絶対に、ママをエッチな目でなんか見ないぞ。そもそもいやらしい目で見るなんてことが、許されない存在なんだからな）

大きく深呼吸を繰り返した宗介は、内心で強く言い聞かせると、瞼の裏に甦りそうになる小夜子の豊乳を懸命に振り払い、机に広げたノートへと視線を戻すのであった。

それから十分ほどのち、勉強を終え小夜子の部屋を訪ねたとき、母は寝室に置かれた一人掛けのソファに座って、熱心に本を読んでいた。熟母の匂いが部屋全体に満ちており、意識しなくても甘い香りに脳が揺さぶられてしまいそうになる。

「お勉強は終わったの？」

「うん。今日やろうと思っていたところは、とりあえず終わったよ」

「そう」

小夜子は本を閉じ、ソファ横のサイドテーブルに置くと、優しい微笑みを浮かべ、立ちあがった。そのまま部屋の中央に置かれたダブルベッドへと歩み寄っていく。

（あぁ、ママのオッパイ、またあんなに揺れちゃってる。ダメなのに、ママをエッチな目で見るなんて、許されないのに……）

ほんの数歩、歩くだけで、白いパジャマを突きあげる豊乳がユサユサと揺れ動き、禁じたはずの邪な感情が、またしても頭をもたげそうになる。血液が集まり出す気配のペニスの前でさり気なく両手を組み合わせ、小夜子に屹立を知られないよう気を配りながらも、視線はどうしても双乳の膨らみに吸い寄せられてしまう。

「さあ、宗ちゃん、来て」

薄い肌掛け布団をまくりあげると、最初に小夜子が横になり、その隣のスペースを目で指し示しながら、いまだに扉の前に立ち尽くしていた宗介を促してきた。

「う、うん。じゃあ、あの、お邪魔、します」

開けられたままであった扉を閉め、ぎこちない動きで部屋の中央に歩み寄ると、おずおずと小夜子の右隣に身体を横たえた。実母がナイトテーブルに置かれていたリモコンで照明を絞る。明るかった室内が暗くなり、淡い光だけが優しく点る。すぐ隣にいる母の表情が、辛うじて確認できる程度の明るさだ。

直後、小夜子は布団をかけてくれる代わりに、横からギュッと抱き締めてきた。

「えっ？　マ、ママ⁉」

あまりに突然だったこともあり、声が自然と上ずってしまう。

（ママがいきなりこんな……。あぁ、柔らかい。ママの身体すっごく柔らかいよ。そう、これだ。こんなふうに寝るとき、ママに抱き締めてもらっていたんだ。あぁ、でも、いまは……。左腕に当たるオッパイ、とんでもなくムニュムニュで、僕……）

小夜子に左側面から抱き締められた宗介の左腕には、たわわな乳房がグニャリと押し当たり、熟れた膨らみが悩ましくひしゃげている感触が、はっきり伝わっていた。その得も言われぬ柔らかさと肌の温もりに、股間が一気にヒートアップしてしまう。

「ずっと、ずっと会いたかったのよ。本当にママはずっとあなたと……。宗ちゃんとまた、こうして一緒に……」

（ママは僕をこんなにも求めてくれていたんだ。離れて暮らした十二年間、本当に僕のことを忘れずに……。また僕と一緒に暮らすことを夢見て、お仕事、頑張ってきたんだって、食事のとき言ってたもんな）

ギュッと抱き締めたまま、耳元で紡がれた母の囁きに、宗介の胸の奥で小夜子に対する愛おしさが一気に募ってきた。長らく離れて暮らしていたとはいえ、肉親の情は確かに心の中で存在しつづけていたようだ。

「僕もだよ、僕もまたママに会えて、本当に嬉しいよ」

いきり立ったペニスが小夜子に当たることを心配し、少し腰を引き気味にしながら、宗介は身体の向きを変え、左半身を下にすると、右手を母の左肩にまわし、お礼とば

かりに抱き締め返した。左腕に当たっていた胸の膨らみが、今度は胸板に感じられる。
「ありがとう、宗ちゃん。そう言ってもらえると、ママもとっても嬉しいわ」
目と鼻の先にある小夜子の美しく整った顔。柔和でありながらも、確かな知性を感じさせる瞳で見つめられると、顔が火照りはじめる。それでも宗介は、母の瞳を真っ直ぐに見つめつづけた。母と見つめ合う恥ずかしさはあったが、それ以上に、安心感が総身を包んでいたのである。それでも、たまに視線が胸板で押し潰れる豊乳に向いてしまうのは、仕方のないことであった。
「うふっ、ねえ、宗ちゃん。そんなにママのオッパイ、気になる？」
「あっ、いや、そんなことは。ご、ごめんなさい」
「ふふふっ、いいのよ。ねえ、昔みたいに、ママのオッパイに、甘えてみる？」
「えっ？」
（ママはなにを言っているんだ。僕に、オッパイに甘えてみるって、それってママの大きなオッパイに触ったり、顔を埋めたりしてもいいってこと？　でも、そんなこと）
乳房に視線を向けていたことを指摘され、バツの悪さを感じていた宗介は、瞳をさらに和ませた小夜子の言葉に、混乱をきたしていた。
母の豊乳に性的興奮を覚えていたのは紛れもない事実であり、もしその膨らみに甘えることができるなら、これ以上の悦びはない。だがしかし、そのようなことが許さ

れることなのか、という疑問も同時に浮かんでいたのだ。
「ねっ、お願い、昔みたいに」
息子の困惑に気づいた様子もなく、小夜子は抱擁を解くと、ベッドの上で上体を起こしあげた。躊躇いのない手つきで、パジャマの前ボタンを外していく。宗介が高校生になっていることを頭では理解していながら、心の中はいまだに幼かった我が子との思い出に満たされているのかもしれない。
「あの、マっ、マ……。はぁ、すっごい、ママのオッパイ、凄く、大きい……」
小夜子に再考を促そうと思った矢先、ボタンの外されたパジャマの上衣がヒラリと左右に開き、驚くほど豊かな、砲弾状の膨らみが露わとなった。
(凄い！　ママのオッパイ、凄すぎる。義母さんも大きいと思ったけど、それよりも二回り以上はあるんじゃ……。一体、どれだけの大きさがあるんだ)
ゴクリと喉が鳴る。淡い明るさの中で姿をあらわした豊乳は、昼間、目の当たりにした映美里の膨らみよりも、ずっとたわわに実っていた。
熟した膨らみは、ずっしりとした重さを感じさせながらも、決して垂れてはいなかった。下乳のまろやかなラインにも張りが感じられ、ベージュがかった乳暈の中心に鎮座する濃いピンクの乳首が、重力に逆らうように、ツンと上を向いているのだ。
(義母さんでEカップということは、ママはそれ以上……。F、いや、Gはあるかも)

義母がくれたブラジャーのサイズがE65であったことは、すでに確認済みだ。それを考慮に入れつつ、宗介は勝手に実母のバストサイズを想像してしまった。

「さあ、宗ちゃん、いいのよ。昔みたいに、ママのオッパイに甘えてちょうだい」

息子が牡の欲望を滾らせつつあることに、まったく思いが至っていないらしい小夜子は、母性的な笑みを浮かべたままでそう言うと、右肘をマットレスについた体勢で横たわり、宗介に熟した双乳を差し出してきた。

「う、うん、じゃあ、あの、ちょっと、だけ」

緊張で声が裏返ってしまいそうであった。それでも宗介は、小さく唾を飲みこみ、右手をのばして母の左乳房に被せていった。

モニュッ、とてつもない柔らかさが手の平全体を覆い尽くす。

(これがママのオッパイ……。こんなに柔らかいだなんて。あぁ、指がどんどんオッパイに沈みこんでいっちゃう)

初めて触れる女性の乳房は、その感触だけで意識が飛んでしまいそうな快感をもたらした。ペニスが下着の中で大きく跳ねあがり、先走りがトロリと溢れ出していく。

「うぅん、どう、久しぶりのママのオッパイは」

「すっごく柔らかくて、気持ちいいよ。あぁ、ママのオッパイ、本当に大きい」

甘い小夜子の囁きに、宗介は恍惚感に包まれたまま、返事をしていた。右手を左の

熟乳に沈みこませながら、自然と顔が膨らみの谷間へと近づいていく。
ポニュッ、鼻の頭が双乳の谷間に入りこみ、両頬には左右の乳肉の柔らかさと温もりが伝わってきた。
「うんッ。昔みたいに、ママのオッパイにお顔を埋めながら、寝てちょうだいね」
鼻から甘いうめきを漏らした熟母は、左手を後頭部に這わせ、優しく撫でてきた。
「あぁ、ママ、ママぁぁ……」
(確かに昔、こうやって甘えながら眠ったことがあったぞ。とっても甘い匂いに包まれて、安心できたんだよな。そうだよ、この匂い。ママのこのオッパイの匂いだ)
鼻腔の奥をくすぐる甘い乳臭。それが記憶の扉をノックし、呼び覚ましてくる。性的興奮は、いつ暴発してもおかしくないところまで高まっていた。しかし一方で、懐かしい安らぎに全身が包まれてもいたのだ。
(ママのオッパイ、本当に最高だ。こんなに柔らかいのに、しっかり指を押し返してくる弾力もあるなんて、はぁ、ずっとこうして触っていたい)
恍惚感に包まれながら、いつしか右手を這わせた左乳房を、やんわりと捏ねはじめていた。搗きたて餅のような柔らかさと、その奥から主張してくる弾力。柔乳と言うよりは、軟乳と言ったほうが近そうな感触に、宗介の呼吸が次第に荒くなっていく。
「あぁ、ママ、気持ちいいよ、ママ」

陶然と呟き、唇を右乳房の先端、濃いピンクの突起に近づけ、パクンと咥えこむ。
「あんッ、ダメよ。甘えてとは言ったけど、吸ってもいいなんて、言ってないわよ」
小夜子は上半身をピクッと震わせながら、困ったような声をかけてきた。
「うん、ごめんなさい、ママ。でも、僕、どうしても、ママのオッパイ、吸ってみたくて、それで……。チュッ、ちゅぱっ、ちゅちゅ……」
宗介はいったん乳首を解放したものの、甘えた声でおねだりをすると、母の返事を待つまでもなく、再びポッチにしゃぶりついた。
「うンッ、もう、しょうのない子ね、宗ちゃんは。大きな赤ちゃんなんだから」
熟母は困惑と諦めの交錯した声で言うと、再び後頭部を優しく撫でつけてきた。
「チュッ、ちゅぱっ、チュヂュッ、ちゅぱっ……」
赤ん坊のように突起にしゃぶりつき、左の乳肉を揉む右手に力を加えていく。
ンニュッ、と指先が軟乳に沈みこみ、一定程度のところで、今度は押し返される。
(はぁ、気持ちいい。ママの大きなオッパイ、気持ちよすぎだよ)
手の平に感じる乳肌の柔らかさ、唇に含む突起の感触、そして鼻腔に密着する乳肉から発せられる甘い乳臭に、まったく刺激を受けることができていないペニスが、切なそうに下着の内側で跳ねあがった。ヂュッとさらに先走りが溢れ返る。
腰がむず痒そうにくねり、実母から遠ざけるように引いていた腰が、柔らかな肢体

に引き寄せられるように元に戻っていく。刹那、パジャマズボンの前を突っ張らせる下腹部が、小夜子の太腿と密着した。
（ンはっ！　これ、すっごく気持ちいい。ママの太腿、とっても柔らかい）
パジャマズボン越しの熟腿の温もりと感触に、射精感が急上昇してくる。
「あっ！　そ、宗、ちゃん？」
「ンチュッ、はぁ、ママ、あぁ、ママぁ、チュ、ちゅちゅっ、ちゅぅぅ……」
母の驚きと戸惑いの声が鼓膜を震わせるも、快感が高まっていた宗介には、まったく聞こえていなかった。ただ一心に、豊乳を揉みながら乳首を吸い、いきり立つペニスを小夜子のむっちりとした太腿にこすりつけていく。
（あぁ、気持ちいい、ママのムチムチ柔らかくて温かい太腿で、僕……。もうすぐ、出ちゃう。今日は一日、ずっと我慢していたから、はぁ、いっぱい出ちゃうよぅ）
ビクン、ビクンッと肉竿が断続的に跳ねあがり、下着の中で極限まで張り詰めている亀頭が、さらなる膨張を遂げていく。睾丸が根本に迫りあがり、煮えたぎった欲望のエキスを輸精管に送りこんでくる。
「ダメよ、宗ちゃん、ねッ、こんなことは、甘えの範疇を超えちゃってるわ」
「ンぱぁ、出る、僕、もう、あぁ、出ちゃうぅぅぅッ！」
困惑した声をあげた小夜子が身体を引くようにして、息子との距離を取ろうとした

直後、しゃぶっていた右乳首を解放した宗介が、絶頂の到来を告げた。
ドピュッ、ずびゅっ、ドピュピュ、どぴゅん……。
腰を激しく震わせるたびに、ペニスには脈動が襲い、下着の内側に白濁液を叩きつけていくのであった。

（出しちゃったんだわ。私の太腿に押しつけて、宗ちゃんが、射精するだなんて……）
パジャマ越しの熟腿に感じる強張りの脈動に、小夜子は呆然としていた。
宗介と一緒に暮らしていた頃を思い出したく、一緒の布団に誘ったのは小夜子自身だったのだが、まさか、このような事態になるとは、想像していなかったのだ。
（少し考えれば、誰にでも分かるくらい単純なことじゃない。高校生の男の子と同じ布団で寝て、さらには胸まで触らせたんだから。原因を作ったのは、間違いなく私。誘ったときに宗ちゃんが戸惑いの顔をしたのは、こうなることを恐れてだったんだわ。それなのに、十二年前の感覚を引きずっていた私は……）
愛する息子と、期間限定とはいえ生活ができる喜び。それが三十六歳の大人の女から、冷静な判断力を奪っていた。
「あの、ごめん、ママ。僕……」
高まっていた興奮の波が引き、少し冷静さを取り戻したのだろう。宗介が気まずそ

うな声で、詫びを入れてきた。しゃぶられていた乳首はすでに解放され、揉みこまれた乳肉からも息子の手は遠ざかり、太腿に密着していた下腹部もすでに引かれている。
（そうよ、戸惑いがあるのは一緒。いいえ、宗ちゃんのほうはさらに恥ずかしさもあるはず。母親として、それを少しでも取り除いてあげなきゃいけないわよね）
心なし青ざめている宗介の顔を見つめ、小夜子はどうにか立ち直ることができた。
「パンツの中に、出ちゃったのね」
「うん、ごめんなさい。僕、ママに対してとんでもないことを」
「謝らないで。宗ちゃんはなにも悪くないわ。高校生なんだもの、当然の反応よ。だから、謝らなくちゃいけないのは、ママのほう。ごめんね、変なお願いしちゃって」
不安げに震える息子の瞳に、先ほどまで感じていた困惑が消え去り、入れ替わるように、限りない愛おしさが湧きあがってくる。
「そんな、ママは悪くないよ。僕、ママのオッパイに甘えながら、思い出したんだ。確かに昔、こんなふうにして、眠っていたことがあったって」
「あぁ、宗ちゃん……」
宗介の言葉に、小夜子は知的でありながらも柔らかな瞳に優しい色を浮かべ、再びギュッと抱き締めてしまった。露出したままの豊乳が、グニョリと息子の胸板で押し潰されていく。パジャマの生地に乳首がこすられ、小さく腰が震えてしまった。

「マっ、ママ!? あ、あの、ぼ、僕……」
「いいのよ、宗ちゃん。今夜はママに甘えてちょうだい」
「あ、ありがとう。でも、その前に、僕、その……」
下腹部が密着しないよう、不自然に腰を引く息子の戸惑った声に、ハッとした。
(そうよ、パンツの中、濡れて気持ち悪くなっているはずよね。ヤダ、私ったら、離婚して以来、そういうことから遠ざかっていたから、気がまわらなかったわ)
泰介と離婚して十二年。小夜子は男性との性的接触を一度も経験していなかった。それだけに、下着の中に射精をしてしまった宗介が、後始末できずにいる状況を理解してやることが、遅れてしまったのである。
「あっ、そうよね、ごめんなさい、ママったら。パンツ、綺麗にしないといけなかったのよね。オチンチンも、ちゃんと拭いておかないといけないし」
「う、うん」
抱擁を解き、上体を起こしあげた小夜子に、宗介は顔を恥ずかしそうに赤らめながら小さく頷いてきた。それが熟母の母性を、いっそうくすぐってくる。
「いいわ、ママが綺麗にしてあげるから、こっちにいらっしゃい」
豊かな膨らみをパジャマから露わにしたままで、小夜子はベッドからおり、息子を手招きしてやった。

「い、いいよ、そんな。さすがに恥ずかしいし。向こうの部屋で、自分で」
「いいから、ママに任せて。元はと言えば、ママの不注意が原因なんだから。さあ」
（いま宗ちゃんを一人にすると、気まずさに苛まれることになるかもしれないわ。初日にそんなことになったら、ずっとわだかまりを抱えたままになる可能性もあるわけだし、気にする必要はないんだって分かってもらうためにも、ここは私が……）
優しい微笑みで再度促すと、恥ずかしそうにしながらも、宗介は小さく頷いた。おずおずとベッドからおりたち、小夜子の正面へとやってくる。息子が着ていた青いパジャマ。そのズボンには楕円形のシミが浮きあがり、色が濃くなってしまっていた。
（あぁ、こんなに染み出てきちゃうほどだったなんて。さぞ気持ち悪いでしょうに。すぐに綺麗にしてあげないといけないわね）
宗介の前で膝立ちとなり、小夜子は息子のパジャマズボンとのその下の下着の縁に指を引っかけた。ペニス側を少し浮かし気味にすると、二枚の生地を引きおろす。
ぶるんっ、小さく跳ねあがるようにして、男子高校生の淫茎が姿をあらわした。射精からしばらく経っていたが、ペニスはいまだに半勃ち状態を維持し、白い粘液にまみれた亀頭先端からは、欲望の樹液が糸を引くように垂れ落ちていた。
（す、凄い、これが宗ちゃんのオチンチン……。こんなに逞しくなっていただなんて。それにこの匂い、なんて強烈なのかしら。こんな強い匂い、初めてだわ）

十二年ぶりにまみえた息子の陰部。子供のモノから大人のイチモツへと成長を遂げたペニスに、改めて時の流れを感じてしまう。

さらには、遮る物がなくなった影響で、ツンッと鼻の奥を刺激する精臭が鼻腔粘膜を襲い、脳が揺さぶられそうになる。長らく使われることなく、ひっそりと眠りについていた淫裂の奥では、久々の牡の精臭に膣襞が小さく蠢きはじめてしまった。

（あぁん、やだわ、私ったら、宗ちゃんの、息子のエッチな匂いを嗅いで、おかしな気分になりはじめてるだなんて）

「あっ、あの、マ、ママ……」

半勃ちペニスを見つめ、感慨と同時に、熟れた女体の目覚めに困惑を覚える。そこに聞こえた弱々しい息子の囁きに、意識が現実へと引き戻された。

「あっ、ごめんなさいね。こんなにいっぱい出ちゃってたのね。パンツの中、気持ち悪かったでしょう。ごめんね、すぐに気づいてあげられなくて」

戸惑いを払拭するように、柔和な微笑みで宗介を見上げた小夜子は、ナイトテーブルに置かれていたボックスティッシュから、複数枚のペーパーを抜き取った。息子に気づかれないよう小さく息をつき、左手で半勃ちの肉竿にそっと触れていく。

「ンはっ、あぅ、あぁ、ママ」

（あんッ、熱いわ。それに、射精が終わってるのに、まだこんなに硬いだなんて……。

はぁ、早くこのヌチョヌチョしたのを綺麗にしてあげなくちゃ）

肉竿も精液で濡れて粘つきを帯びていた。さらには完全勃起の余韻の熱が残り、頼りなさと逞しさの同居した半勃ちの硬度も加わって、熟れた性感が刺激を受ける。

「大丈夫よ、ママがちゃんとしてあげるから、少しだけ、我慢してね」

かすれそうになる声で言うと、小夜子は欲望のエキスが滴る亀頭へとティッシュを近づけ、付着する精液を優しくこすり取ってやる。複数枚重ねたティッシュに、見る見るうちに白濁液が染みこみ、すぐに表面に滲んできた。

（凄い量だわ。この何倍もがパンツの内側にべったりついちゃってるのよね。そっちは軽く拭くだけで、明日、洗濯するにしても、表面に残っている量だけで、ティッシュがすぐにネバネバでいっぱいになってしまうだなんて）

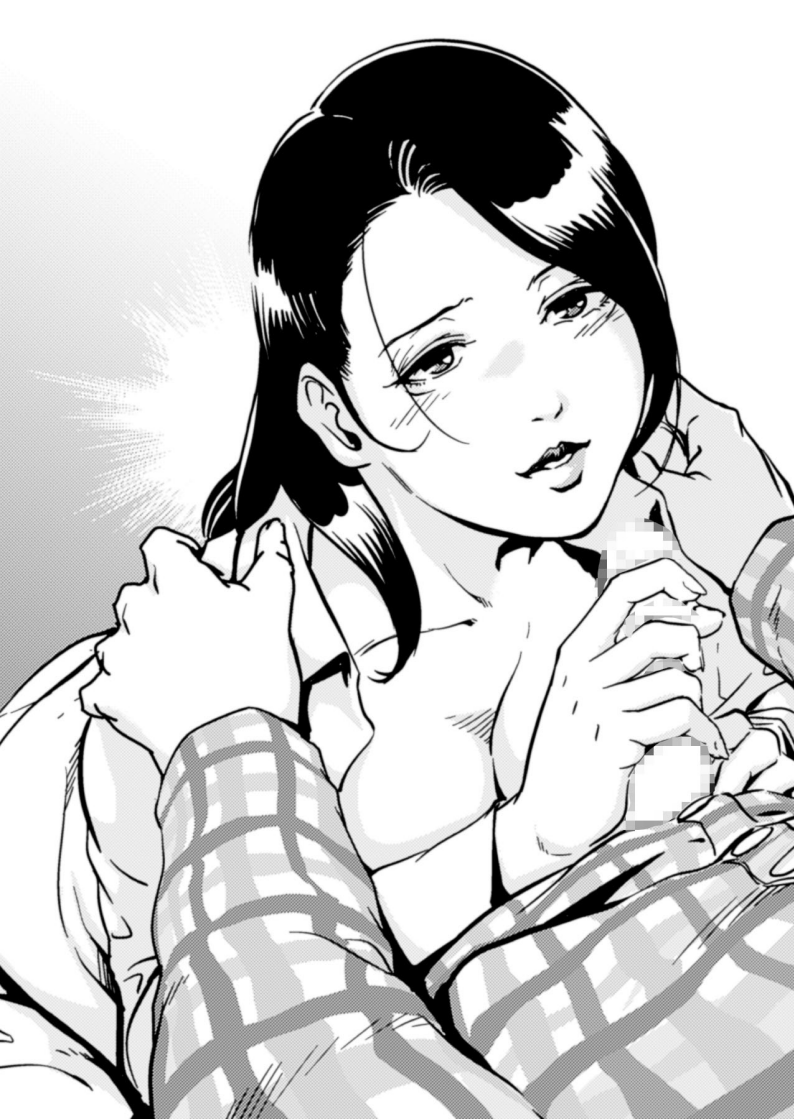
息子の射精量に驚きを感じつつ、ペニスにティッシュ屑が残らないよう、丁寧に清拭していた小夜子は、粘液をたっぷり吸いこんだティッシュを丸めてゴミ箱に捨てると、新たに複数枚をボックスから抜き取り、再び淫茎へとあてがっていく。

「くはッ、ダメ、そんなふうに優しくスリスリされたら、僕、また、ンはぁ……」

竿の部分をさするように拭っていると、宗介の腰が大きく跳ねあがった。直後、左手で触れていた肉竿にも胴震いが走り、ムクムクとその体積を増してくる。膨張したことにより精臭も濃くなり、熟女の鼻腔の奥を妖しくくすぐってきた。

「えっ？　そ、宗、ちゃん……」
「ごめん、ママ。でも、僕、そんなふうに触られたこと、なかったから。それに、拭いてくれるたびに、ママのオッパイがユサユサ揺れてて、それで……ごめんなさい」
思わずペニスに添えていた手を離すと、ペニスは下腹部に張りつきそうな急角度でそそり立った。亀頭が膨張し、拭って綺麗にしてやったばかりの鈴口からは、早くも先走りが滲みはじめている。
（嘘でしょう。出したばっかりで、こんなにすぐ大きくなるなんて……。それも母親の私の手に反応してだなんて、許されないことは分かってるけど、でも、嬉しい）
後始末のつもりが、逆に息子を興奮させてしまった戸惑いを感じつつも、十二年ぶりの母子の触れ合いに、小夜子の母性は満たされていた。
（あぁん、でも、このエッチな匂いは危険だわ。大きくなったことで、一気にきつくなってきてる。この匂い、久しぶりすぎて、私のほうまで変な気分になっちゃいそう）
「本当に、ごめんなさい。僕、ぼく……」
いまにも泣き出しそうな顔をした宗介に、小夜子の胸はきつく締めつけられた。
（そうよ、宗ちゃんに気まずい思いをさせないために、なんでもないってことを分からせる意味もあって、私が綺麗にしてあげてるんじゃない。これじゃ、まったくの逆効果だわ。胸をさらけ出したままの私にも問題があるわけだし）

「謝る必要はないって、さっきもママ、言ったでしょう。刺激を受けて気持ちよくなっちゃうのは、普通のことなんだから」
「でも」
「うふっ、このままじゃ、辛いでしょうから、今夜は特別に、ママがこうやって」
右手に持っていた精液を含んだティッシュをゴミ箱に捨て、母性的な笑みで宗介を見上げる。不安そうな面持ちの息子に頷きかけ、右手を改めて強張りにのばすと、竿の中央付近を優しく握った。そのままコシコシと上下にこすりあげてやる。
「ンはぅ、ママ、ダメ、そんな、くッ、こすられたら僕、あっという間に、また……」
「いいのよ、出してちょうだい。ママがまた綺麗にしてあげるから、我慢しないで」
「あぁ、ママ、くぅン、マっ、マぁぁぁぁぁ……」
宗介の腰がビクンッと大きく震え、両手で小夜子の両肩を掴んできた。パジャマ越しにも、息子の両手が熱を帯びているのが分かる。
（あぁ、私、なんてことを。十二年ぶりに会った息子の硬くなったオチンチンをこするだなんて。母親として許されることではないわ。でも、これで宗ちゃんの恥ずかしさは、少しは軽減されるはずよ。なんて言っても、実の母がしてるんだもの）
「気持ちいいのね。ママが手でこうしてあげると、気持ちよくなってくれるのね」
ヂュッ、グチュッ、細指で逞しいペニスを扱きあげてやるたびに、垂れ落ちてきた



粘液と熟母の指がこすれ合い、粘ついた摩擦音が起こる。さらには、鈴口から漏れ出た先走りの匂いが濃くなっていく。その匂いに、熟れた性感が刺激を受け、肉洞内の柔襞がその蠢きを強めてしまう。

（あぁん、どうしましょう。宗ちゃんの匂いに触発されて、私まで……。こんなこと、絶対にダメなのに。ずっとエッチしてなかったから、その反動もあるのかしら）

子宮に重たい疼きが走り、腰が自然とくねってしまいそうになる。

ヂュッ、蜜液がパンティの股布に滲み出したのが分かると、羞恥が一気にこみあげてきた。その恥じらいを隠すように、息子のペニスを握る手に力がこもる。

（はぁン、それにしても、なんて硬くて、熱いのかしら。こんな逞しいオチンチン触るの、初めてだわ）

指を焼かれるような熱さと、鋼のような硬さに、熟母の腰が震えてしまう。

「ぐふぉッ、あぅ、あぁ、ママ、そんな強く、されたら、僕、ほんとに出ちゃうよ」

「出していいの。遠慮は要らないわ。ママのお手々で、いっぱい気持ちよくなって」

ヂュチョッ、クチュッ、手淫速度を速め、強めに扱きあげてやると、粘ついた淫音がさらに大きくなった。断続的にペニスが跳ねあがり、それにつれ宗介の身体の揺れも大きくなっていく。小夜子の両肩を掴む手にこめられた力も強くなってくる。

（ンッ！　宗ちゃんの指が肩に食いこんで、ちょっと痛い。でも、それだけ気持ちよ

くなっているってことでしょうし、水を差すようなこと、言うべきじゃないわね）

パジャマ越しの両肩に食いこむ息子の指の強さに、一瞬、顔を歪めはしたものの、小夜子は強張りのこすりあげを継続していた。

チュッ、くぢゅっ、漏れ出した先走りが細指に絡み、熟女の指先も卑猥な光沢を放っている。その粘り気と立ち昇る精臭に、熟母の脳は酔わされていた。

（あぁん、ほんとに凄いわ。こすってあげるたびに、宗ちゃんのオチンチンが元気に跳ねあがってる。はぁ、このままじゃ私、本当におかしくなってしまいそう）

息子の強張りをこすりあげつつ、小夜子の腰は自然と揺れ動いていた。パジャマズボン越しに太腿同士を小さくこすり合わせ、淫裂に刺激を送りこんでしまう。

クチュッ、手淫とは別の小さな蜜音が鼓膜を震わせ、全身が燃えるように熱くなる。

「おぉぉぉ、ママ、いいよ。僕、もう、くッ、あぁあ……」

「はぁン、すっごい。宗ちゃんのオチンチン、さらに大きくなったわ。ほんとにもうすぐ、出ちゃいそうなのね」

「うん、僕、ママの手で、くッ、揺れる大きなオッパイ見ながら、出ッるぅぅッ！」

上気し潤んだ瞳で宗介を見上げた直後、切なそうに眉間に皺を寄せていた息子が射精感の到来を告げた。

ドビュッ、ずぴゅっ、ドピュ、どぴゅん……。

一気に膨張した亀頭が弾け、二度目とは思えない勢いで白濁液が迸り出てきた。
「キャッ、あんッ、すっごい、熱いのがいっぱい、ママの顔にまで……」
勢いよく噴き出した欲望のエキスが、正面に陣取っていた小夜子の顔面を直撃した。
ドロッとしたゲル状の塊が頬や鼻の頭で弾け、熟れ肌に航跡を残すようにゆっくりと垂れ落ちていく。鼻腔を直撃する濃厚な牡の匂いに、頭がクラッと揺れた。
「ごめん、ママ、でも、僕、我慢できなくて、あぁ、出る、また、出ちゃうぅぅ」
「いいのよ、気にしないで。溜まっているもの、全部出してしまいなさい。はぁン、凄いわ、顔だけじゃなく、オッパイにまで宗ちゃんの熱いミルクがかかってきてる」
顔ばかりか、露わになっている豊乳にも熱いエキスは迸り、なめらかな乳肌を伝うように、深い谷間に落ちこんでくる。
「おぉぉ、ママ、ママぁぁぁぁッ！」
（凄い。こんなに濃い精液、初めてだわ。それも十二年ぶりに一緒に暮らす息子の精液を浴びるなんて。はぁン、ダメ、私、この匂いと、熱いミルクの感触だけで……）
腰を震わせ、射精の脈動をつづける息子の性を浴びながら、小夜子自身も軽い絶頂に見舞われるのであった。

弾かれたように顔をあげた息子が小さく頷き、Tシャツの裾に両手をのばす。蠱惑の微笑でそれを見つめ、映美里はスキニージーンズのボタンを外した。ファスナーを開放し、ヒップを左右に振るようにして、脚に張りつくジーンズを脱ぎおろす。

「義母さん、とっても綺麗だ。本当にもうすぐ僕、義母さんのその身体で……」

「そうよ、宗くん。もうすぐよ。だから、早くズボンも脱いでしまいなさい」

Tシャツを脱いだだけの状態で、ウットリとした眼差しを送ってくる宗介に、映美里はジーンズも脱ぐよう促した。

（今日、こんなことになるんなら、もっとセクシーな下着にすればよかったかしら）

ジーンズのボタンに手をかけていく息子を見つめ、そんな思いが脳裏をよぎる。

この日の下着は、ピンクのハーフカップのブラジャーと同色のパンティ。ハーフカップブラから覗く双乳は、確かに色っぽいであろうが、薄布はシンプルだ。前面に装飾のほとんどないパンティ。強いて色っぽい面をあげれば、貼りつく薄布に陰毛がかすかに透け、その広がり具合を見せていることくらいである。

「あっ！　す、すっごい。宗くん、もう、そんなに大きく……」

ジーンズと靴下も脱ぎ、白いボクサーブリーフ一枚になった息子に、映美里は驚きの声を発した。ボクサーブリーフの前面が、小山のように盛りあがり、その下に隠されたペニスが、完全勃起していることを伝えてきている。

「だって、憧れていた義母さんとエッチできるんだって思ったら、それだけで。それに、義母さんの下着姿を見たら、自然にこうなっちゃうよ」
「まあ、宗くんったら。いいわ、最後の一枚は、義母さんが脱がせてあげる」
宗介の言葉に艶然と微笑み、映美里は息子の前にしゃがみこんだ。真正面に、下着に守られた男子高校生の強張り。唾を飲みこみ、両手をボクサーブリーフの縁に引っかける。宗介が、ピクッと小さく震えた。その反応に微笑ましさを感じながら、映美里は前面を浮かせ気味にして、白い下着を引きおろした。
ぶんっ、唸りをあげるように屹立が飛び出し、ペチンッと下腹部を叩くと、そのまま裏筋を見せつける急角度でそそり立った。亀頭は早くもパンパンに張り詰め、漏れ出した先走り液でうっすらと光沢を放っている。
「す、凄いわ。宗くんのオチンチン、こんなに、大きくなっていただなんて……」
(小夜子さんの家に行く前夜と、当日の昼間、押しつけられた硬いオチンチン、まさかこんなに逞しいものだったなんて……。これがもうすぐ、私の膣中に……)
宗介のペニスをまともに見るのは、一緒に入浴をしていた頃以来だ。それだけに、逞しく成長した息子の肉鏑に、肉洞がキュンッと反応し、膣襞が一気にざわめきだしてしまった。ヂュッ、分泌された淫蜜が、早くもクロッチに溢れ出していく。
「義母さん、あの、は、恥ずかしいよ」

「あっ、ごめんなさいね。でも、とっても大きくって、立派よ。こんな素敵なオチンチンの初めてをもらえるなんて、義母さん、感激」
自身の肉体変化を押し隠すように、息子を上目遣いで見た映美里は、右手をのばし肉竿の中央付近をやんわりと握りこんだ。
（キャッ、ほんとに凄い。こんなに熱くて、硬いだなんて……）
驚くほどに熱い、肉の漲りにゾクリと腰が震えてしまう。膣襞がキュンキュンと蠕動し、クロッチにいっそうの蜜液が滴り、シミを作りはじめていた。
「ンはっ、くッ、義母さん、ダメ。そんな優しく握られたら、僕、すぐに……」
「えっ？」
切なそうに腰をくねらせて悶える宗介に、映美里は戸惑いの表情を浮かべた。
（少し触っただけで、こんな鋭い反応をするだなんて。経験のない男の子って、私が思っている以上に敏感なのね。一度、出してあげたほうがいいかもしれないわね）
「じゃあ、最初に一回、出しておきましょうか」
「一回、出すって、あの」
「うふっ、義母さんがしてあげるわ。少しだけ、我慢してね」
悦楽に耐えるように眉間に皺を寄せている息子に、母性と淫性の混ざり合った微笑を送ると、映美里は右手に握った強張りを少しだけ押しさげた。

張り詰め、ツンッとした牡臭を放つ亀頭に、ぽってり肉厚の朱唇を近づけていく。
「えっ、か、義母さん、まさかッ！　あぅっ、あっ、あぁ……」
「チュッ、ペロ、ペロペロ～ン……」
亀頭先端に軽くキスしただけで、宗介の全身が大きく跳ねあがった。同時に強張りに胴震いが起こり、鈴口から濃厚な先走りが溢れ返ってくる。
新たな粘液で唇を濡らした映美里は、いったん亀頭から朱唇を離すと、上目遣いに息子を見上げたまま、舌を突き出し、肉竿の裏筋を舐めあげていった。鼻の頭が亀頭裏に最接近し、アンモニア臭と先走りの精臭に、鼻腔の奥が刺激される。
（はぅン、シャワー、浴びてないから、汗とおしっこの蒸れで舌がピリピリしちゃう。でも、これが宗くんの味なんだわ。八年間大切に育ててきた息子の……）
生臭さも、舌先に躍る先走りの苦みも、すべてが愛おしく感じられる。
映美里はウットリとした顔を晒し、ペロン、ペロンとアイスキャンディーを舐めるように、漲る肉竿に舌を這わせつづけた。
「義母さん、ダメ、そんな、くッ、竿、ペロペロされたら、すぐに出ちゃうよ」
「ふぅン、いいのよ、出して。そのために、してあげてるんだから。でも、そうね。出すのなら、義母さんのお口の中に、ちょうだい」
軽くウェーブのかかったライトブラウンの髪の毛が、宗介の両手でクシャッと掻き

毟られた。唾液に濡れた肉竿から舌を離し、潤んだ瞳で見上げると、凄艶な笑みとともに肉厚の朱唇を開き、はぅッ、と口腔粘膜に張り詰めた亀頭を迎え入れた。
「くほッ、くッ、あぁ、す、すっごい、僕のが、本当に義母さんのお口に……」
「ンぐッ、ふぅン、ぢゅぱっ、チュッ、くちゅっ、チュプッ……」
肉竿を握る右手を根本に這わせ、その手を追うように朱唇を進めていく。強張りを少しずつ、口腔粘膜の奥へといざなう。
(宗くんのこれ、見た目以上に大きい。お口に入れると、その大きさと硬さがよく分かるわ。はぁン、それに、鼻の奥にエッチな匂いが充満していて、ここ数年、ご無沙汰だから、私のほうがたまらなくなっちゃいそうだわ)
鼻腔の奥から直接脳の快楽中枢を揺さぶられる感覚に、映美里の腰が大きくくねった。適度な肉づきの太腿をこすりつけ合うと、チュッと小さく蜜音が起こり、よじれた股布で刺激を受けた淫裂から、新たな蜜液がこぼれ落ちてしまう。
「義母さん、くぅぅ、はぁ、出ちゃう。僕、ほんとに、ぐッ、出ちゃうよぅ」
(いいのよ、出してちょうだい。いつもは義母さんのパンティに出している白いのを、今日はお口にいっぱい出して。そしてそのあとは、義母さんの膣中に……)
肉洞内がジンジンと切なく疼く感覚に腰を揺らしながら、映美里はいったん根本までペニスを咥えこみ、次いでゆっくりと首を前後に振りはじめた。

「くちゅっ、ズチュッ、ンくぅン、ちゅぱっ、ぢゅちゅっ、ぢゅぱっ……」
「ンほぅ、あぁ、義母さん、かぁ、さンッ」
ミディアムショートのウェーブヘアに宗介の指が絡みつく。さらに、本能的な行為なのか、腰が小さく前後に動きはじめている。
(はぁン、宗くんったら積極的に腰を動かしはじめて。いけない子なんだから)
「ンぐッ、うぅん、むぅン、ぢゅちょっ、クチュッ、ちゅぢゅっ……」
口腔内で断続的に跳ねあがる強張り。息子が腰を使いだしたことによって、膨張した亀頭が不規則に頬の内側にこすりつけられる。苦悶の表情を浮かべつつ、映美里は強張りを離すことなく、キュッと窄めた朱唇で肉竿を扱きあげ、舌を亀頭に絡みつけていく。濃度の増した先走りの味わいに、おんなの性感がいっそう煽られる。
太腿同士のこすり合わせをより強くし、自身の快感の増幅を図りつつ、肉竿の根本を押さえていた右手を小さく前後に動かし、緩やかな手淫を見舞ってやる。さらには、それまで空いていた左手を陰嚢に這わせ、手の平で優しく睾丸を転がしてやった。
「ぐはぅ、あぁ、義母さん、それ、ダメ。そんなことされたら、ぼ、僕ぅぅ……」
「ヂュポッ、クチュッ、ぢゅる、ちゅぱっ、チュポ、チュポ……」
クシャクシャッと髪の毛を掻き毟られながら、映美里は首の前後動をさらに速めた。朱唇で竿部分を扱きあげ、頬を窄めて、口内に溜まった唾液で亀頭を翻弄していく。

「ああ、義母さん、出るよ、僕、もう、ほんとに、あっ、あぁ、出ちゃうぅぅぅッ！」
直後、宗介の全身に激しい痙攣が襲いかかった。亀頭がさらに膨張し、次の瞬間、猛烈な勢いで白濁液が迸り出た。
ドビュッ、ドピュッ、ずびゅっ、ドピュ、どぴゅん……。
「ンぅ！　ふぅ、うぅン、コクッ……むぅぅ、うンッ、コクン……」
（すっ、凄い！　なんて量が出てくるの。それに、すっごく濃厚で、飲みこんでも喉に張りついてくるみたい。あぁ、ダメよ、こんな濃いの大量に飲まされたら、私、宗くんの精液に酔ってしまいそうだわ）
喉の奥を直撃してくる濃厚な白濁液に目を瞠りつつも、映美里は脈動をつづける強張りを根本までしっかり咥えこみ、射精の脈動が治まるまで、欲望のエキスを小分けにして嚥下しつづけた。
「はぁ、義母さん、くッ、はぁ、おぉぉぉ……」
愉悦のうめきを伴った脈動は十五回近くつづいて、ようやく治まりを迎えた。
「ゴクッ、うっぅン、ンぱぁ、はぁ、はあ、いっぱい、出たわね」
コッテリとした粘液を最後の一滴まで飲み干し、映美里はようやく強張りを解放した。艶めかしい息をつき、淫靡に潤んだ瞳で息子を見上げていく。
「あぁ、義母さん。凄かったよ。まさか、義母さんがフェラチオ、してくれるなんて」

「うふっ、すっごく濃くて量も多いんで、ビックリしちゃったわ。でも、美味しかったわよ、宗くんのザーメン。少し休けぃ……えっ!? す、凄い、いまいっぱい出したばかりなのに、まだ、こんなに……」

ネットリと絡みつくおんなの眼差しで、上気した宗介の顔を見つめていた映美里は、再び強張りに視線を落とした瞬間、驚嘆の思いにかられた。射精直後にもかかわらず、息子のペニスはいまだに天を衝き、隆々とそそり立っていたのである。

(あぁん、本当に凄いわ。これが高校生の男の子ってことなのね。こんなに旺盛だなんて……。はンッ、泰介さんには申し訳ないけど、ほんとに素敵だわ)

夫への罪悪感が一瞬、胸に湧きあがったものの、しばらく遠ざかっていた女の欲望と、息子への愛おしさによって、オーバーライドされていった。

「ごめん、義母さん。僕、まだ、その、出し足りないって言うか、その……」

「謝ることではないのよ。若いんだから当然よ。すぐにでも経験したいでしょうけど、その前に少しだけ、義母さんのあそこも、舐めてくれるかしら?」

すぐにでも挿入して欲しい気持ちは、映美里も強かった。しかし、射精直後の息子におねだりするのは、やはり母としてはしたなすぎるように思え、ワンクッションを置く形で、クンニを求めたのである。

「もちろんだよ。あぁ、夢みたいだ。義母さんのオマ〇コ、舐められるなんて」

「あんッ、宗くんったら、そんなエッチな言葉使って。いけない子ね」
凄艶な微笑みで宗介をたしなめつつ立ちあがると、恍惚の表情を晒す息子と見つめ合ったまま、両手を背中にまわし、ハーフカップのブラジャーのホックを外した。ホックが外れた瞬間、ぷるんっと揺れながら、円錐形の美乳が姿をあらわす。
「義母さんのオッパイ。とっても綺麗で、大きなオッパイ」
「あとでいっぱい、触ってちょうだいね。でもいまは、こっちよ」
ブラジャーを床に落とし、両手の指を今度は薄布の縁に引っかけていく。腰を悩ましく左右に振りながら、ピンクのパンティを脱ぎおろす。ンチュッ、股布が淫唇と離れた瞬間、粘ついた蜜音が起こり、クロッチと秘裂の間に細い蜜液の橋が架かった。
「はぁ、義母さんのあそこの毛……。ゴクッ」
デルタ型に茂ったヘアが露わになった瞬間、宗介は感嘆の呟きを漏らし、喉を大きく鳴らした。その嚥下音が鼓膜を揺らし、息子に秘唇を晒す背徳と羞恥を煽ってくる。
(義理とは言え母親が、高校生の息子に見せていい場所でないことは分かってる。でも、いまさら宗くんを小夜子さんに盗られたくない。宗くんは私の息子なんだから)
小夜子は実母であり、「盗られる」という言葉が適切ではないと理解はしている。だが、八年間育てた息子を奪われるという思いは、非常に大きかった。特に、子供を産める可能性が高くないと言われていることも、宗介への執着に拍車をかけていた。

「うふっ、オッパイはこの前見せてあげたけど、こっちは初めてだったわね。さあ、いいのよ、見て。そして、触ってちょうだい」
悩ましく腰をくねらせながら、映美里はシングルベッドの縁に浅く腰をおろした。スラッと長い美脚を、ゆっくりと開いてやる。
クチュッ、淫蜜を溢れさせている淫裂が、艶めいた音を立て、口を開けていく。
「あぁ、義母さん……」
ウットリとした眼差しで義母を見つめる宗介が、崩れるように映美里の脚の間にしゃがみこんできた。正面から三十一歳の淫裂に熱い視線を送ってくる。
「凄い！　これが義母さんの、オ、オマ○コ……はぁ、エッチに濡れて光ってるよ。それに、ビラビラがはみ出していて、とってもエッチだ」
「はンッ、宗くん。いいのよ、触ってくれて。ほら、奥まで見せてあげるから、義母さんのここ、舐めて」
淫裂に視線を感じ、背筋がゾクリと震えた。それでも映美里は両手を濡れた秘唇へのばすと、薄褐色で肉厚な陰唇に指を這わせ、ンチュッと左右に開いてみせた。刹那、新たな蜜液がトロッと溢れ出し、スリットに這わせた両手の指を濡らしてくる。
「すっ、凄い、奥まで、膣奥のヒダヒダまで丸見えになってる。あぁ、ここに僕、これを挿れさせてもらえるんだね」

肉洞内でうねり、挿入をいまや遅しと待ち侘びている膣襞。そこに視線を張りつけにしたまま、宗介は右手で裏筋を見せつける勃起ペニスを握っていた。無意識の行動なのか、そのまま指を上下に動かし、強張りをこすりあげていく。

「あんッ、そうよ。もうすぐここに、宗くんのオチンチンが入るのよ。でも、その前に、義母さんのここ、少し舐めてちょうだい。そうしたらすぐにでも、義母さんが宗くんを大人にしてあげるから。だから、自分でオチンチン、弄っちゃダメよ」

「あぁ、義母さん。う、うん、じゃあ、あの、触らせて、もらうね」

義母の言葉に、息子はかすれた声で返すと、右手を握っていた屹立から離し、映美里の左内腿に這わせてきた。同時に左手も右の内腿に這わせ、適度にむっちりとしたスベスベの腿肌を撫でつけながら、グイッとさらに大きく開かされる。

「はンッ、宗くん……」

「近づくと、エッチな匂いがさらに濃くなってきたよ。あぁ、義母さん」

息子の熱い手で内腿を開かれた瞬間、腰骨が小さく震え、甘いうめきが漏れてしまった。その間にも宗介は膝を進め、腿肌に這わせた指先を根本方向へとすべらせてきた。それに合わせて映美里はスリットを開いていた指を離す。すると今度は、少年の指先が淫蜜に濡れたスリットに這わされ、クパッと左右に圧し広げられた。

「あふッ、くぅン……」

小刻みに震える宗介の指先の感触に、腰がビクンッと跳ねあがった。トロッとした蜜液がさらに溢れ返り、今度は息子の指先を濡らしてしまう。
「すっごい。義母さんのオマ〇コ、ヌチュッとしてて、プニュッと柔らかくて、とってもエッチだ。はぁ、義母さん……」
「あんッ！　はぅ、あっ、はぁン、そ、宗、くンッ」
感に堪えない表情で呟いた息子が、淫裂へと一気に顔を近づけた。次の瞬間、突き出された舌先で、ぬめる秘唇をペロッと小さく舐めあげてくる。刹那、脳天に鋭い淫悦が突き抜け、快感の火花が眼窩で瞬いた。
「チュッ、ペロ、ペロペロ、はぁ、義母さんのオマ〇コジュース、ちょっとピリッとしてて酸っぱいけど、これが憧れの義母さんの味なんだね。すっごく嬉しいよ」
「はぁン、宗くん。いいのよ、舐めて。もっと義母さんを味わってちょうだい」
いったん秘唇から口を離した息子は、愉悦に歪む顔をあげウットリと囁いた。それに対し映美里は、淫靡に濡れた瞳で見つめ返し、両手を宗介の頭部に這わせると、愛おしげに髪を撫でつけてやった。直後、少年の唇が再び淫唇と密着してくる。
「チュッ、ちゅぱっ、ンはぁ、ペロ、れろ〜ン、チュバッ、ぢゅちゅ……」
「うぅン、あぁん、上手よ。宗くんに舐められて、義母さんもいっぱい感じちゃうわ」
宗介の舌が肉厚の淫裂を舐めあげるたびに、映美里の腰が小さく跳ねあがった。

（ほんとに宗くんに、いやらしく濡れたあそこ、舐められちゃってる。あぁ、私、なんて淫らな母親なのかしら。息子にあそこを舐められて、感じちゃってるなんて）
決して的確な愛撫ではなかった。ぬめった舌が単調にスリットを往復していくだけの味気なさ。しかし、その刺激を与えてくれているのが、息子である事実が、三十路をすぎ脂の乗りはじめた肉体を持つ義母には、たまらない快感であった。
「クチュッ、むぅん、ちゅぱっ、ちゅぱっ、ンヂュッ……」
「あんッ！　そ、そこはッ、くッ、うぅ～ン」
なんの前触れもなく、宗介の舌が秘唇の合わせ目にまでのばされた。
球状に硬化し、包皮から顔を覗かせていたクリトリス。舌先が一瞬、かすめただけであったが、強烈な淫悦が脳天を突き抜け、首を大きくのけぞらせてしまった。
淫突起への刺激に反応するように、柔襞がいっそう卑猥に蠢き、大量の淫蜜が息子の唇に向かって溢れ出ていく。
「ンふっ、ふぅン、コクン。チュッ、ちゅちゅ、チュパッ……」
苦しげなうめきをあげた宗介は、それでも義母のスリットから唇を離すことなく、舌を懸命に動かし、滴る蜜液を舐め取ってくれている。
（あぁん、一瞬だけだなんて。もっとクリちゃんをペロペロして欲しかったのに。でも、経験のない宗くんに、そんなこと分からないわよね。はぁン、ダメ、膣奥がジン

ジンして、硬いので思いきりこすりあげてもらいたくなっちゃってる）
　ピクッ、ピクッと腰が妖しく震えはじめていた映美里は、息子の髪に這わせていた両手をおろして宗介の頬を挟みつけると、半ば強引に淫裂から離させた。
「ンぱぁ、はぁ、はあ、義母、さん」
　唇の周囲を粘液でべとつかせた顔で見上げてくる息子に、背徳感がより高まる。
「宗くんが上手に舐めてくれたから、義母さん、たまらなくなっちゃった。だから、ねッ、宗くんの初めて、義母さんにちょうだい」
「あぁ、義母さん。いよいよ、なんだね。ついに僕、義母さんと……」
「そうよ。さあ、ベッドの上にきて」
　早くも法悦の顔を晒す宗介に、艶然と微笑みかけ、映美里は浅く腰をおろしていたベッドから立ちあがると、改めてその上にあがり、枕に頭を乗せる形であお向けとなった。浅いM字型に両脚を開き、息子を誘いこんでいく。
「か、義母さん……」
　再び緊張の面持ちとなった宗介がベッドにあがり、開かれた義母の脚の間に身体を入れてきた。
「大丈夫よ。義母さんがちゃんと挿れてあげるから」
（いよいよ私は息子と……。宗くんの硬いのが私の膣中に……）

背徳感にゾクリと背筋を震わせつつ、それでも映美里は右手を息子の股間でいきり立つ強張りにのばした。肉竿の中央を優しく握り、ゆっくりと引き寄せてやる。
「うわッ、あぅ、あぁ、義母、さンッ」
「大丈夫だから、落ち着いて。ゆっくり義母さんに身体を重ねていらっしゃい」
「う、うん」
かすれた声で返事をした宗介が、映美里の上に覆い被さるようにしてきた。両手を義母の顔の横につき、不安げな眼差しで見下ろしてくる。それに優しく頷き返し、右手に握ったペニスをさらに引き寄せた。
くぢゅっ、粘ついた音を伴い、亀頭先端が濡れたスリットと接触した。
「あんッ、分かる？　宗くんのオチンチンが、義母さんのあそことキスしたわよ」
「うん、分かるよ。あぁ、ダメ、そんなオマ〇コでスリスリされたら僕、出ちゃうよ」
「はンッ、我慢よ。すぐ義母さんの膣中に入れてあげるから、少しだけ我慢して」
（はぁン、いいわ。宗くんの張り詰めた亀頭で表面こすられるだけで、たまらなくなっちゃう。でも、焦らすような真似、できないわね。宗くんは初めてなんだから、一刻も早く迎え入れてあげないと）
切なそうに眉間に皺を寄せる息子を励ましつつ、映美里はさらに何度か亀頭先端で淫唇を撫でつけ、膣口を探っていった。ぬめった粘膜同士がこすれ合うたびに、熟れ

た性感が刺激を受け、甘い吐息が漏れてしまう。
グヂュッ、それまでよりも粘つきの強い音を伴って、亀頭先端が膣口に少しだけ圧しこまれた。
「あんッ、ここよ。ここが義母さんの入口。いいわよ、そのまま腰を出してきて」
「あぁ、義母さん。いっ、いくよ」
上ずった声で返してきた息子が小さく息をつくと、グイッと腰を突き出してきた。
ンヂュッ、くぐもった音とともに、亀頭が肉洞に圧しこまれてくる。
「ンはッ、あぁん、きてる。宗くんの硬いのが、義母さんの膣中に、はぁン、大きい」
(凄いわ。ほんとに、なんて硬さと大きさなの、こんなにカチンコチンで熱いオチンチン、初めて。あぁん、ダメ、奥まで挿れられただけで、私、イッちゃいそう)
宗介の強張りが膣襞を抉りこむように侵入してくると、映美里はその逞しさに息が止まりそうになった。悦楽に柳眉を歪め、両手を息子の背中に這わせていく。
「あぁ、かっ、義母さン、くぅぅ、すっごい、義母さんのウネウネでこすられると、信じられないくらい、気持ち、いい……」
初めて味わう蜜壺は、熱くぬかるんでいた。いきり立つ強張りにはウネウネと膣襞が絡みつき、腰を動かしていないにもかかわらず、妖しくこすりあげてきている。そ

の初歩的な蠢きだけで、早くも絶頂感を覚えてしまった。
（これが、セックス、義母さんのオマ〇コに僕、本当に挿れちゃってるんだ。あぁ、こんな凄い快感があっただなんて。くッ、自分でこするのはもちろん、ママの手や、義母さんのお口よりも、ずっと気持ちいい）
「はぁン、いいのよ、宗くん、腰を動かしてちょうだい。逞しい宗くんのオチンチンを、義母さんの膣中にいっぱいこすりつけていいのよ」
「ダメだよ、そんなことしたら僕、すぐに……。こうして挿れてもらっているだけでも、出ちゃいそうなのに、腰なんか動かしたら、さらに我慢できなくなっちゃうよ」
義母の知的で切れ長の瞳が、いまや完全に蕩けきっていた。見つめられただけで、ゾクリと背筋に愉悦が走るほどの艶めかしさだ。その瞳で見つめられ、鼻にかかった艶声で律動を促されても、射精してしまう恐怖で宗介は動くことができなかった。
「あんッ、バカね、いいのよ、出して。初めてなんだから、我慢できなくて当然よ。それに、どうせ出てしまうのなら、なにもしないよりも自分から動いて気持ちよくなったほうが、きっと素晴らしい体験になるわよ」
「う、うん、じゃあ、あの、動かしてみるよ」
映美里のさらなる促しに、宗介は小さく頷くと、恐る恐る腰を引いていった。
ンヂュッ、粘ついた音を立て、ペニスが蜜壺から抜けていく。そのわずかな動きだ

けでも、肉竿や亀頭に張りつく膣襞でこすられ、目も眩むほどの快感であった。
「くふッ、あぅ、あぁ、こ、これだけで、くッ、気持ち、いい。はぁ、ああ……」
「あぅン、義母さんも気持ちいいわよ。宗くんの硬いオチンチンで、あそこのヒダヒダが引っ張り出されちゃいそうだわ。さあ、今度はもう一度、奥まで突き挿れて」
「おぉぉ、義母さん」
義母の艶声に背中を押され、宗介は再び腰を突き出した。ヌヂュッ、粘ついた蜜音とともに、強張りが再び肉洞の中に埋まりこむ。うねる柔襞の出迎えに、快楽中枢は激しく揺さぶられ、睾丸がキュンッと迫りあがりそうになった。
「はンッ、そうよ、その調子で、つづけて」
「うん」
悩ましく悶え皺を眉間に寄せる映美里の、おんなの顔に背筋を震わせた宗介は、歯を食い縛り、迫り寄る射精衝動をなんとかなだめながら、腰を前後させつづけた。
グチュッ、ズチュッ、ニュヂュッ、卑猥な摩擦音が沸き起こり、ペニスが義母の膣襞で扱きあげられていく。
「くほぅ、あぁ、義母さん、義母、さンッ……」
(なにこれ、信じられないくらい、気持ちいい。義母さんのヒダヒダで優しくこすられると、それだけで本当に……)

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/